

# 千葉哲郎の「冬彦について」

千葉 明

私の長兄千葉哲郎は、明治45年に岩手県前沢町（現奥州市）に生まれました。盛岡中学から岩手師範学校に進み、県内の小中学校に長く勤め、定年退職後は地元の町の教育長を10年近く勤めました。

兄は若い頃から寺田寅彦を敬愛しており、公職を退いてからも「藤棚の蔭から—寺田寅彦の教育・教師論—」という自筆の冊子を作り、知人に差上げておられます。その中には、「寅彦の随筆は、教育という題名を掲げているものは僅少だが、そのどれもどれもが広義の、いや深い深い含蓄のある教育論であり教師論であると思う」と書いています。

兄はこれより先に「木羽集」という随筆集を出しており、私は久しぶりにこれを読み返したのですが、その中にある「冬彦について」という文がとても気に入ったものですが、これを「榭」に取り上げていただこうと投稿することにいたしました。

兄は昭和56年69才でなくなり、もっと長生きしてもらいたかったのですが、寺田寅彦そしてこれも敬愛していた中谷宇吉郎の本を愛好する心は、今でも弟達や息子達に引き継がれています。

## 「冬彦について」

千葉 哲郎

私が冬彦の名を知ったのは教師になって間もない頃だったと思う。

何かの雑誌に、誰であったかも忘れたが、冬彦の随筆は、それを読んだ人と読まぬ人とで必らず教壇に立っての営為の上に、ちがったものを持たせる。子供のみかたにおいても、物事の考え方においても、社会事象に対する考察に於ても。——というようなことがかいてあった。

教師になったばかりで全てに不安であり、自信のない私にとってはいい助言だと思い、早速「冬彦集」と「続冬彦集」を買ってすぐ読んだ。そして心からありがたいと思った。同僚のI氏も私の話を聞いてすぐ注文したが、着本の間を待遠しがって私のを持っていたことを覚えている。あれから二十年「冬彦」は私にとって絶対になくされない座右の書である。

現在までに単行本六冊を揃え得ただけで、五、六冊は借りて読んだ。私が揃えたい本の第一である。先日「物理学序説」が手に入った時の感慨は大きかった。

以下覚書ふうに冬彦について述べてみたい。

新しい小学校中学校の国語教材に冬彦の作品が取入れられたことは、何としても喜ばしい限りである。前者には六年生に「茶わんの湯」、後者には一年生に「涼み台」という題で「新星」と「線香花火」が出ている。子供の教材だと笑わないで、読んでみていただきたいと思う。

「枕草子」「徒然草」等によって確立された日本の文芸形式としての随筆が、冬彦にきて最高の表現を見出したと、漱石門下の小宮豊隆は言っているが、彼の随筆の高さは彼の人間としての高さであると思う。その高まいなえい知をもって社会事象を批評し、正と不正、善と悪、美と醜をハッキリと摘出して、私達に物事について反省の機会と筋道とを与えて

くれている。これからの私達が新しい文化をまとめ上げ得るためには、自分の中の何を克服し、又何を助長すべきであるかを実に鋭く、適切に述べてあり、すぐれた文明批評でもある。博士は専門学者中の専門学者であり、地球物理学ということについては何一つわからぬ私も、冬彦の随筆から教えられること多大であるゆえんである。

子規、漱石等多くの友人先輩との交流によるものであろうが、彼の青少年時代の研さんが極めて正統で、文学と科学と互に交叉させながら進んでいった跡が察せられ、人間的教養としての文芸に親しむことの重要さを思うのである。とにかく慌しく騒しく狂おしい現代社会を静観しつつ、深く祖国を愛し憂えた冬彦、今私達がよみかえすことの有意義を思う。

誰も承知のことと思うが、明治以来の日本文芸はどちらかと言えば、変態な発達の仕方をしてきたようで、「文壇」の本流に偉い人があまりなくて、かえって傍流にそういう人の出ているのも面白く、鷗外も、漱石も「文壇」から言えば傍流で、冬彦は鷗外、漱石よりも一層「文壇」というものから遠い存在であった。しかし彼の初期の短篇も随筆も正しく書かれた文学史に於ては、明治、大正、昭和を通じて類のない位置を占めるべきであり、現在に於ては、そのあとを継ぐ人は北大の中谷宇吉郎博士であるだろう。

明治三十八年から四十一年にかけ、彼が二十八才から三十一才の時に書いた名作「団栗」「竜舌蘭」等も、もともと彼の動きは職業的でなかっただけに、一つとして表面、文壇の批評に上ったことがなかったといわれている。しかし、かえってこの事はこれら作品の幽谷花のような清高さにそぐわしい、感じさえもち、客観的な態度の底にひかる澄んだ冬彦の眼、根底に哀愁をたたえながら、しかも表面は、その為に曇ることない理性によっていぶされた独自の抒情詩であることを思う。「千鳥」の三重吉、「銀のさじ」の中勘助、「団栗」の冬彦の三者は、独自のマイクロコスムを築き上げ、その天地に於ては、断じて他の追随を許さぬ漱石門下の三羽がらすとして、永く想い起して愛誦するに足る作家であるといわれていることも、彼の作品を知る上に大切な事と思う。

冬彦の随筆は大別して、一、物理学的知識の日常事象への適用、二、思いつき（自然現象と社会現象との類似）、三、個人的な新しい観察の三つにわけ得られるように思う。日常の自然や社会の現象が色々の豊富な自然科学的知識を以って解明され、読んでいて実にスッキリと割り切れた感じのすることが魅力である。その文章は感性的であり、鷗外の文章の悟性的なものとは対比される。鷗外の文章は一つ一つがハッキリとしており輪かくが明らかで一つの文章から他の文章へのつながりが、又じつに緊密で必然的になっているが、これに反して冬彦の文章は流れて飛んで、作者の感性のみによって統一されている。従って作者の感性について行けなければ、この随筆について行けないかも知れない。——文章を例示すればいいが紙面の都合により略す。

最後に一言批評家としての冬彦に触れてみたい。

今の日本をさがして、冬彦程の映画批評をする人は見出し難いのではないかと思う。古い映画のみであるが、「モロッコ」「パリーの屋根の下」、「踊る線条」「にんじん」等々の批評に見られる視野の広さ、映像と言葉、形と音と運動との関係の解説と示唆、実に多くを教えられる。

まとまりのない文章になってしまったが、冬彦の作品にじかに取組む人が出るならば、私の大きな喜びである。（昭和二四年）